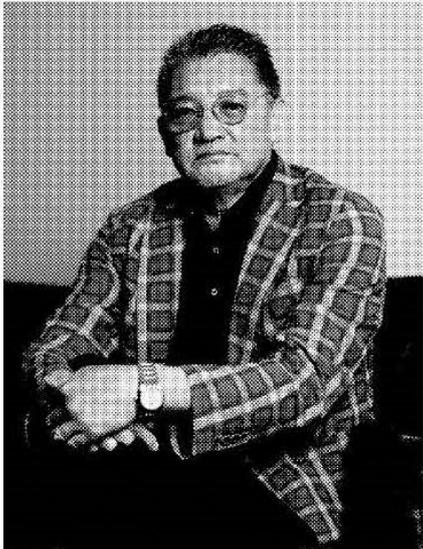




長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」は、いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

普段ほとんどTVドラマを見ないのですが、昨年放送された『不惑のスクラム』(NHK)という作品は思わず見入ってしまった。主演は高橋克典さんでした。誤って人を殺し、刑務所へ入っていた男の役です。出所したものの、すべてに絶望した男が、同じく居場所がなく、人生に傷ついた中年男たちとともにラグビーチームを結成するという男の再生物語でした。

俳優 萩原健一



「私は末期のがん患者の役なんです。(中略) 生き抜こうとしている役柄ですが、途中で死にます。でも非常に面白い役なので、ひとつ見えて楽しんでいただければありがたいと思います」

まさか、このとき、本当に重篤ながん向き合っていたとは。年齢を重ねる大きな美点は、人に優しくなれることだと思えます。川を転がり続ける石のように、次第に角が取れて丸くなっていく。ショーケンの「円熟期」。もっともって見えていたかったのですが、3月26日、都内の病院で亡くなりました。68歳でした。

死因のGIST (消化管間質腫瘍) という病名を、今回初めて知った人も多いでしょう。年間10万人あたり罹患(りか)率は1/2人、「希少がん」として扱われま

す。消化管にできる腫瘍といえは、胃がんや食道がん、大腸がんをイメージしますよね。それらは粘膜の表面(上皮)から発生しますが、GISTは消化管の壁の中(筋層)に発生します。進行とともに吐き気や腹痛、下血や吐血などの症状が出ますが、特有の症状はなく、早期発見にくい病気です。

ショーケンにGISTが見つかったのは、2011年。彼は公表をせぬまま仕事を続けました。8年も病気を隠しながら仕事のできたのは、おそらく分子標的薬治療をされていて、その効果があったのだと想像します。

。このドラマの撮影のときも、一部の関係者以外はその事実を知らなかったそうです。役作りのためにラグビーのパス練習なども行っていたとか。この作品の表情が実に良かった。こんなに優しい笑顔をする俳優だったっけ、と意外に思えたほどでした。

希少がん「GIST」を隠しながらも演じ抜いた

自らががんを隠しながら、がんで死ぬ役を楽しみながら演じるなんて。思えば彼は、「ショーケン」という、強がりやんちゃな男の役を演じ続けた一生だったのではないのでしょうか。派手に生きた彼の遺言は、「(葬式等)派手なことをやるな」だったとか。最期までカッコよすぎです。